

漁業経済 学会短信

No. 36
82. 3

第二七回大会シンポジウム

「漁業利用の経済的諸問題」

島・増田報告によせて

秋山博一

古い話で恐縮であるし、不勉強をさらけだす結果になりかねないが、北大の研究者による歯舞、猿払の沿岸漁場（漁業権漁場）の利用方式の論文を読んで感じたことがある。

その一つは、いわゆる村張り経営、網組など旧来の共同経営についてであり、二つめは漁協の民主主義についてである。

村張り、網組などは、多くは定置、地曳などの大漁業か海藻、貝類採取業の分野に設立されていた。当初はおそらく、①巨大な資本投資を必要とするため、②漁場を独占排他的に利用して他の漁業の操業を制約せざるを得ないため、③漁利を均等に配分するためなどの理由で、村中一同あるいは関係漁民一同が集って共同したものであろう。

しかし、その後、漁民層分解が進むにつれ

て、村張り等共同経営の構成員も分解し、たとえば、共同経営の漁利の配当権たる株も分解し、半株主、4分の1株主が発生するとともに、大株主も現れ、それが村張りや網組の支配者となっていく。しかも、その大株主は、漁民ではなく、山林地主等であったりする。いわゆる羽織漁師である。

このような村張り、網組が、漁業制度改革時に、多くは漁協自営や生産組合に再編された。新らして設立された漁協の役員にも、これら共同経営の支配者が居坐った。「組合自営はカリカチアだ」と叫んだ理由である。

歯舞、猿払方式も同じ運命をたどりはしないか。たとえば、ホタテ業者の資格を制限したり（猿払）、特定漁業のために操業を制約したり（歯舞）しているが、こうした徴候が漁業危機の深まりや漁民層分解の激化のなかで、自分達集団の利益を守るための組織原則として拡大強化されはしないか。

あるいは、島民が危惧しているように、「ケガニ業者の特権的恩恵の享受に対する非難の矛先を巧みにかわす手段」、つまり社会的緊張の緩衝器になりはしないか。さらには、共

同経営からの賃金または配当金がベースにあつて、家計補助的な低賃金が実現するといった戦前形態にみる低賃金の補完物になり下りはしないか。

「歴史は二度くり返す。二度目は茶番劇として」という言葉があるが、この新しい共同経営、漁場管理方式も、結局は同じカリカチアの運命に墮するのではないか。

個別的所有の対象になり難い海のもつ自然生産力を維持、管理するには、集団的利用、管理、規制が必然であろう。しかし、その必然性は、個別経営の利用追求運動との矛盾相克のなかで、実態化するのだから現実の漁場利用方式が必ずしも正しい選択であるとは限らない。しかし、問題なのは、誤った選択が行われたとしても、それを直ちに修復する力がどこにあるかということである。

歯舞、猿払方式も、今は正しい選択であったとしても、自然的、社会経済的条件の変化によって反対物に転化するかも知れない。そのとき、一段と高い方式を生み出す力があるのか、ないのか。

北大の研究者による報告は、この点に焦点をしばったものではないが、しかし重大な示唆がある。それは、漁村における民主主義運動の存在と、その運動を漁場利用方式に反映していく漁協の民主的運営についてである。

猿払の場合は、零細漁民による「ケガニ漁業権解放運動」に端を発した共同経営を前駆段階としてホタテ漁業の猿払方式が成立している。歯舞の場合は明確に述べられていない。「定置漁業権を一部権利者より開放せよ」という非権利者である地元組合員の広範な要求を背景として「歯舞方式が生み出されている。

もち論、こうした運動は古今東西を問わずいつの世でも存在する。

なにも歯舞、猿払だけの話でない。村張り、網組の時代でも、非権利者の斗争は大なり小なり存在した。大きく異っている点は、こうした運動、(いわば改革の原動力)を推進し、実現していく基盤があったということである。それが漁協の民主的運営であり、それを支える専門家集団が形成されているということである。

こゝで専門家集団というのは、自然科学的な知識と技術を身につけている専門家というよりは、水協法、漁業法を始め各種の法律、規則から会計、経理に至る知識や、官庁、大学研究所や漁協系統団体等に顔見知りがあるといったノウハウをもって知る知識集団である。これらの集団が、漁民の要望を整理し、体系化し、実現化させるのである。

このような専門家集団が、漁協内に存在することは、嘗って見られなかったことである。

村の有力者が漁村を支配し、漁協をにぎり、彼の発言が、すなわち漁民の声であり、漁協の意見であった。漁協の職員は、有力者の従属物であった。こうしたなかでは、漁協内に専門家集団など育つ余地はなかった。

ところが今では全く異っている。これら専門家集団なくしては、一日たりとも漁協の運営は不可能になっていると言っても過言でない。総会、理事会などは、最高意思決定機関であるが、その意思決定を可能とさせる諸資料は専門家集団(漁協職員や職員上りの役員)の作成するところであり、その実施もまた彼等である。こうして、彼等は、事実上の漁協経営者となっていく。歯舞、猿払方式が実現した理由はこゝにあるのではなからうか。

漁業権管理方式や漁場の利用形態は、その地域の個別的な条件によって決められてくるので、歯舞、猿払方式を、たとえば瀬戸内海に適用は無理だろう。また、この経営、利用方式から直ちに現行制度の性格や問題性をみちびき出すことも早計であるし、間違いであろう。

たゞ、こゝで言えることは、協同組合としての民主主義が守られ、専門家集団がそれを原則として活動していくことによって、漁場利用のいくつかの選択権のなかで、最良ものをえらんでいくだろうということである。

そして、当面の漁業制度も、それらの行動の自由を許していることである。(決して保証しているのではない)。

◎各地の研究会だより(第三回)

「西日本漁問研」の

研究会活動

「研究会は学会にとつては、いわば血管みたいなもので、これが硬化すれば、いくら血色がよくて見るからに丈夫そうでも、じつは明日の命が知れないということだ」、との言辞は、いまを去る三二年前「漁業経済研究」第四巻第一号(一九五五・七)の編集後記で、上杉重二郎氏が「学会の発展を願って」と題する一文の中で述べたものである。会員の研究会活動が不活発なこと、会費未納者が多く学会財政が赤字になっていること、外部からの関係で受動的におこなわれる委託研究者が少なくないことなどの状況が関連していることを指摘して、漁業経済研究の発展のために研究者の研究スタイルのあり方に警鐘を乱打した一文である。

いま、学会の活動が全体として停滞的だということも必ずしも云うことができない。高齢化傾向が著しいとはいえ、昭和一ケタ層は依然として学会の主力として活躍しているし、

若手の入会者もふえている。

しかし、研究会活動は活発だとは必ずしも云えない。名実ともに漁業経済学をメシのタネにしている人は三〇年前と比較してもさほど増えた印象がしないこと、研究の後継者問題が発生しつつあること等の状況があるだけに、研究会活動を活発にしたいという願望には上杉氏が指摘した時代以上に切迫感があると思う。そういう意味で、三一年前の上杉氏の、研究会活動Ⅱ血管論は今でこそ重みのある言葉ではなからうか。しかし、まえおきが少し長くなったが、ただ漫然と研究会活動をやれというのでは今日では研究を進展させることにはならないことだけはたしかである。

西日本漁問研は会員の研究テーマ、研究水準の錬磨、向上のために各会員が研究会に理論および現状に関する課題を自由に提起しうる機会を保証したいとの主旨から設けられたものである。

研究会活動の原則として大体次のようなことが確認されている。①会員は各個別テーマについて報告を行なうが、それは漁業経済研究の方法と体系においてなされるものであること。②もちろん、研究会における報告・討論の成果と責任は各個人に帰する。漁問研としてはいっさい関知しない。③会員は全て報告を行なうものとする。但し、若手の報告を

重視する。

本研究会は会費の納入を義務づけていない（各開催地での当番による研究会としてのし）、多頻度に関く条件も乏しい。研究者の多い東京などと比べると条件はよくない。それだけにおたがいに厳しい研究会とするよう申し合わせている。

これまでの研究会の模様を記すと以下のとおりである。

第一回・一九八〇年七月（下関）

吉木武一「以西底曳網漁業経営史論考」

浜田英嗣「産地水産物流通の研究視角」

第二回・一九八〇年九月（福岡）

楠本勝英「漁業財政論」

第三回・一九八〇年十一月（長崎）

廣吉勝治「漁場利用再編論に関する解題的整理」

第四回・一九八一年四月（鹿児島）

吉木武一「養魚業の漁場利用問題」学会シンポに臨んで」

第五回・一九八一年七月（下関）

浜田英嗣「沿岸漁獲物の市場構造と卸売市場問題」

米田二三「漁場利用の経済的諸問題の研究視点について」学会シンポの小括」

第六回・一九八一年二月（福岡）

片岡千賀之「シンガポールを中心とした日本漁業」

廣吉勝治「水産物流通機構論批判」

☆次回研究会の事務局☆

〒852 長崎市文教町一の十四

長崎大学水産学部 吉木武一

電話〇九五八一四七一―一一一

（内線二四八六）

（文責・廣吉）

◎在京理事会報告（三月一日）

一、二九回大会の準備について

大会の日程、場所、シンポジウムの報告者、コメンテーター、司会者等大会開催にともなう具体的事項について討議した。

（大会、シンポジウムの詳細については別項に記載）

二、学会誌の編集状況について

学会誌の編集は、現在二六巻四号、二七巻一。二合併号の作業を進めている。

二七巻三号以降についても鋭意努力している。（「編集担当理事より」を参照のこと。）

三、学会誌の頒布価格の変更について

学会誌の頒布価格について協議、二七巻一・二合併号より次のように変更することを決定。

合併号 二、〇〇〇円

三、四号 一、五〇〇円

四、学会発足三〇周年について

三〇周年にあたって、記念大会の開催あるいは記念誌の発行等を企画するか否かを討議、引続いて在京理事会で検討することとした。

五、今後の日程予定

五月一日 在京理事会

(十八時より 東水大)

二四日 在京理事会

(十八時より 東水大)

二七日 全国理事会

(十七時より 東水大)

二七日 学会賞選考委員会

(十六時より 東水大)

◎科学研究費研究会報告

文部省科学研究費「二〇〇カイリ時代における日本漁業の構造的研究」の実施について在京理事会で検討した結果、短信三五号で報告しましたように、研究会を発足させ、次のような活動を展開しています。

第一回研究会

十月三日 東京水産大学 参加者九名

研究会の目的、研究方法、範囲および分担等について討議

第二回研究会

一月二二日～二四日 北海道大学

参加者一五名

第一回研究会で設定された分担課題について、それぞれ報告、それにもとづいて、論点の整理、全体の方向づけを行うとともに今後の研究のすすめ方を討議した。

なお、第三回の研究会は、五月三〇日東京水産大学で行う予定。

◎大会準備担当理事より

一、第二九回大会の日程等

在京理事会報告にもありましたように次のような場所・日程で開催準備を進めています。

場所 東京水産大学

日程 五月二八日(金)

一般報告

五月二九日(土)

シンポジウム「漁場利用の

経済的諸問題」

二、シンポジウムの準備状況

シンポジウムは二七・八回大会に引続いて「漁場利用の経済的諸問題」をテーマに行います。報告者は

米田 一三三氏、浦城 晋氏、堀口

健治氏、高山隆三氏に依頼、第一回検

討会を三月十八日(漁業問題研究会の

例会)に、第二回検討会を四月二四日(土)、最終検討会を五月二七日(木)に開催するよう作業を進めています。

三、一般報告の募集

一般報告について、会員各位の多数の参加を希望しています。大会までには日数がありますが、テーマが決まり次第事務局まで連絡して下さい。

なお、一般報告の報告要旨(四〇〇字三枚以内)の締切り、送り先は、次のようにして下さい。

締切り 五月八日必着

送り先 〒一〇二 東京都千代田

区麹町四の五

海事センタービル内

海上労働科学研究所

服部 昭氣付

四、大会についての詳細は、大会案内特集

号の短信において連絡します。

◎学会賞選考委員会より

昭和五六年度の学会賞の選考にあたり、候補論文を委員まで推選して下さい。なお、委員は次のとおりです。

長谷川 彰 中井 昭

二野瓶 徳夫 岡 伯明

平沢 豊 大島 襄二

岩切 成郎

◎学会誌編集担当理事より

学会誌編集の進行状況

学会誌の編集は 二六巻四号を四月初旬に、二七巻一・二合併号「シンポジウム特集号」を五月に刊行する予定で作業を急いでいます。

各号の構成は次のとおりです。

。二六巻四号

論文 「水産物卸売市場機構再編成の現段階」

廣吉 勝治

「東南アジアにおけるまぐろ延なわ漁業合併事業の可能性」

松田 恵明

実態報告

「沿岸漁業における老人漁家の形成と脱漁民化のパターン」

島 秀典

書評

平沢 豊「日本の漁業・世界の漁業」

。二七巻一・二合併号

シンポジウム特集

論文「養殖業における生産力発展と漁場管理の意義」

志村 賢男

「のり養殖漁家の階層分解と漁場利

用」

陣内 義人

「養殖漁家の成長と地域漁場の管理」

吉木 武一

報告

「第二六回大会後記」

小野 征二郎

書評

大津 昭一郎、酒井 俊二「現代漁村民の変貌過程」

柿崎 京一

秋谷 重男「中央卸売市場」

廣吉 勝治

学会誌総目次

一卷一号〜十巻四号

(学会誌の総目次は三回に分けて掲載する予定です。)

◎新入会員の紹介 (敬称略)

田平 紀平 鹿児島大学

篠塚 朝人 全国海苔貝類漁業協同組合連合会

◎事務局通信

一、ポーンナス・カンパの報告

過日行いました昭和五十六年度ポーンナス・カンパですが、会員各位のご協力により所期の目的を達成いたしました。ここに報告致します。

募金額 (三月一日現在)

一九七、〇〇〇円

募金者数 五四名

募金者氏名 (順不同 敬称略)

岡 伯明	高山 隆三
倉田 亨	柿本 典昭
平沢 豊	山本 忠
榎 彰徳	岩崎 京至
吉木 武一	益田 庄三
米田 一二三	嘉成 三郎
浜口 光也	鶴田 正裕
増田 洋	大和 裕子
高橋 泰彦	中塚 興
松坂 利道	堀口 健治
二野瓶徳夫	長谷川 彰
青野 寿郎	田中 豊治
岩切 成郎	池松 政人
宮崎漁連	中井 昭
桜井 俊文	市川 英雄
浜崎 礼三	西村 章作
近藤 康男	清水 悟
服部 昭	石田 好数
大島 襄二	浜田 俊一
阪本 楠彦	木下哲一郎
大喜多甫文	府和正一郎
志村 賢男	片岡千賀之
増井 好男	相沢 昂
地井 昭夫	小野征一郎
鎌倉 靖夫	林 知夫
浅野 長光	関田 英里

